

新田次郎全集

第十一卷

新田次郎全集 **11**

新潮社版

める町の高い煙突

由師

ある町まちのたか高い煙突・笛師ふえし
新田次郎全集第十一卷

昭和五十二年二月二十五日発行
昭和五十二年八月十日三刷

定価九五〇円

著者 新田次郎にったじろう

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社

東京都新宿区矢来町七一千162 振替東京四一八〇八
電話 業務部 03(266)五一二 編集部(266)五四二一

印刷 株式会社金羊社

製本 神田 加藤製本

© Jiro Nitta, 1975, Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

ある町の高い煙突

*

笛師

*

昭和新山

解題

5

203

317

348

ある町の高い煙突・笛師

ある町の高い煙突

両側から杉林がせまっている狭間を一気に駆け抜けけると、眼の前に赤く色づいた柿の実におおわれた村落が見えて来る。馬はそこまで来ると、間近に飼い葉のにおいでも嗅いだように速くなった。関根三郎はその馬の勢いに拍車を掛けるように、

「ヒー、ヒーッ」

と、語尾を引き上げ気味に叫んで一鞭当てると、馬上に身を伏せた。田圃の中の道は一直線に入四間村まで続いている。馬を力いっぱい走らせるにはもってこいの道である。馬の背に身を伏せた関根三郎は、手綱を許したままで、前方を見つめた。稲刈りが終ったばかりの田圃に人はまばらである。

関根三郎にとってはこの道をこうして愛馬の弦月と突っ走るのがもっとも楽しいときであった。あるときは敵陣に向って突き進む若武者になり、あるときは一万騎を率いて

走る武將になり、またあるときは単騎古城を出でて遊ぶ王子の氣持になっていた。

腰のあたりでかばんが鳴った。肩に掛けたかばんが、かさつかないように、腰のあたりを縄できつくしばってあるのだが、やはり鳴った。かばんの中の筆入れの中味が鳴っているのだなと思うと、彼は、明治三十六年の時代を背景にした中学校三年生関根三郎の現実の姿にかえるのである。馬は土橋をひと飛びに越えた。そこからはややゆるい坂道である。入四間村と、村をかこむ紅葉の中に、彼の愛馬は突進していこうとしていた。

坂を登り切ったところで彼は手綱を引きしめると同時に、
「ハアッ、ハアッ」

短く、つめたい声で二度叫んだ。祖父の関根兵馬から、教えこまれた大坪流馬術の停止の懸け声であった。

村の中に出ると、道に子供が出て遊んでいることがあるから、一応、馬を止めたのである。弦月はそれが不平なのか、首をふり立てて一声高くいなないた。三郎は手綱をそろえて、左手に持つと、右手で、弦月の頸のあたりを軽く叩いてやり、その手で中学校の制帽をかぶり直した。弦月はすぐに落ちついて並み足になった。

村の中央を道と川と並んでいる。川の流れに沿って上流にやった三郎の視角の中に十数人の村人の姿が見えた。そ

これらの村人たちは口々になにかいいながら村の上の方へ走っていった。いつもなら、馬のいななきが聞えればそっちの方を向いて、そこに現われた関根三郎に対してなんらかの挨拶をするのが当り前であつた。挨拶がなくとも、関心を示すのは分り切つたことであつた。関根家は代々この村の名主を務めている郷士で、田圃二十町歩、山林数十町歩を持つ資産家であつた。この村には同姓の関根が何軒かあつたが、すべて、分家であり関根を名乗らぬ者でも、その多くは、関根家となんらかの経済的つながりを持っていた。だから村の人は関根兵馬のことを本宅の大旦那と呼び、三郎のことを本宅の三郎様又は本宅の三郎さんと呼んでいた。若旦那と呼ぶには若すぎたからであつた。

(なにかあつたのだな)

と三郎は思った。阿武隈山脈の末端に位置する北常陸山塊に頭を突つ込んでゐるこの村のことだから、イノシシが一匹獲れたぐらいで村中大騒ぎになることは珍しいことではなかつた。三郎は村の中心の関根家の門前で馬からおりると、手綱を持ったまま、塀に沿つて十五間ほど歩いたところの厩門から中に入つて弦月の背から鞍をおろし、飼ひ薬を与えた。

馬のあとしまつが終つたところで、彼は厩の前にある井戸端で手だけ洗つた。足の草鞋はそのままだった。

「異人だつてさ」

「異人がなにしにこの村へ来たのだ」

塀の外で話すそんな声が聞えた。三郎はその声にちよつと耳を傾けたが、すぐ腰にぶらさげている手拭を抜き取つて手を拭くと、くぐり戸を開けて庭へ入つていった。

関根家はかつてこの高台一帯に広大な居屋敷をかまえていた。縦横それぞれ、二町に三町ほどの土塁を周囲にめぐらせ、その中に、一族の他、被官、名子^{なご}が住んでいたのである。戦国時代の豪士はそのような自衛手段を取らねば生き残ることができなかったのである。時代が降るに従つて、居屋敷は縮小されていった。土塁はこわされ、土地も一族に分割され、寄子^{よりこ}、名子もそれぞれ独立して生計をいとなむようになっていった。関根家は、旧居屋敷の中心地に居をかまえ、名主となり、郷士となり、関根の本宅と呼ばれるようになったのである。

関根家には旧家らしい門構えや塀や石垣などが残っていたが、その中でも、庭の築山と泉水は昔のままの面影を残していた。

三郎はかばんを横抱きにして築山のうしろを廻つた。足を洗つて玄關から上りこむのは面倒だったから庭から入つて縁側にかばんを置いて、そのまま山へきのこを取りに行こうと思つていた。土曜日であつた。そのつもりで、常陸

太田の中学校から三里の道を、馬で駆け戻って来たのであった。

だが、縁側には祖父の兵馬と並んで、祖母のいねが坐っていた。庭には村の人たちが三人ほど立っていた。彼等は口々になにかしゃべっていた。外をゆびさしながら異人という言葉をさかんに口にしていた。村の中に起った重大事を知らせに来たと同時にその指示をあおぎに来た様子だった。

「三郎か、ちょうどよかった、ここへ来い」

兵馬は庭に入って来て、丁寧に頭を下げた三郎を見ると、いかにも大旦那様らしい鷹揚さで縁側の方へ差し招いた。

「異人がこの村へ来た。この村始まって以来のことだ。御岩神社の前で、なにやらいつているそうだが、村の衆には皆目分らん。上の鉾山の技師だろうという人もある。お前は中学校で英語を教わっているのだから、なんとかなるかもしれない、行って見てやれ」

兵馬のいい方は命令口調であった。

「赤沢銅山の技師ですか、だがその異人は英語が話せるかな」

異人だって、ドイツ人もあればフランス人もロシア人だって。三郎はそう思っていた。

入四間の村から山を越えて一里たらずのところに銅山が

あった。天正十九年（一五九一年）ごろに赤沢銅山として試掘されて以来、時代の経過とともに、しばしば経営者が変ったが、銅の発掘はずっと続けられていた。そこで最近、やや大規模な銅の採掘を始めていることを入四間の村人たちは知っていたが、強いてその鉾山に近づこうとはしなかった。村人たちは鉾掘り人夫（かほくりひと）に対して、強い警戒心を持っていた。

「鉾山の人だかどうか分らない、とにかく異人が来たのだから、いまのところお前が行くより仕方があるまい。お前にだってその異人がなにをいつてるかぐらい分るだろう」

兵馬はおしつけるようないい方をした。

「はい。行ってまいります」

三郎はそういうより仕方がなかった。この古武士かたぎの祖父のいつけにそむくことはできなかった。はいという三郎の言葉には張りがあったが、内心、異人と話す自信はなかった。奥から足音が聞えた。筒袖の着物を着て、結いあげた髪のでっぺんを赤い紐で結んだみよが走り出て来て、

「お兄ちゃんと一緒に行く、お兄ちゃんにおんぶして行く」

と叫んだ。いねが、怖い異人がいるのだといっても、みよは首をふった。しまいには、足踏みをして、三郎と一緒に

に行くとき泣き叫んだ。幼くして両親に死なれて祖父母に育てられたみよは、甘え切っていた。泣けばどうにでもなるものと思ひこんでいるようだった。

三郎は泣くみよに背を出した。みよは三郎の背につかまると、けろりと泣き止んで、

「はやく異人のところへゆけ」

といった。みよも異人がなにものか知らなかったのである。赤い髪をした異人は、御岩神社の社務所の前でおおぜいの村人にかこまれていた。異人は、狐に來たらしかった。狐銃を社務所の入り口に立てかけて置いて、村人たちにしきりに笑顔で話しかけるのだが村人は遠巻きにして近寄ろうとしなかった。

三郎が行くと、村人たちは彼のために道をあけた。当時中学校へ行くものはごく少数だった。資産家の子弟であると同時に、抜群の秀才でなければ中学校へは入れなかった。中学校へ行けば英語は自由に話せるものと村人たちは思ひこんでいた。異人は、少女を背負って前へ出て來た少年に眼をやった。期待をこめた眼で三郎を見た。三郎はその異人の眼窩の奥で輝く青い眼がこわかった。怖さにせき立てられるように、

「あなたは誰ですか」

三郎は学校で教わった英語を生れてはじめて口にした。

顔がほてった。結果に対しては全く自信はなかった。

「オー、あなたは英語が話せるのですね。私の名前は、チャールス・オールセン、この山の向うにある鉾山の技師です」

異人はそう答えたが、三郎には、異人がいったことばの中で、私の名前と、技師という二語が分っただけであった。「あなたの名前はなんというのですか？」

三郎は再び質問した。それも教科書にあったとおりだった。

「チャールス・オールセン」

異人は今度はゆっくり答えた。

「あなたの名前はチャールス・オールセン、そして私の名前はサブロー、セキネである」

三郎はそれだけいとほとした。

「分りました。そしてあなたの背中の少女は、あなたの妹さんですか」

チャールス・オールセンがゆっくりいってくれるから、今度一度で分った。

「違います。彼女は私の許婚者である」

許婚者という英語はまだ学校で教わってはいなかったけれど、三郎は和英辞書を引いて知っていたから正直に答えたのである。三郎は水戸の土族菊池作左衛門の三男として

生れ、十二歳のときみよと夫婦になる約束で関根家へ養子に迎えられたのである。

「するとあなたは将来、その少女と結婚するのですか、そのように約束されたことにあなたは何等かの疑問を感じないとする、これはまことに東洋的、神秘的婚約である」

オールセンはゆっくりと何度か繰り返したあとで、

「私の国にも許婚者はたくさんいます。でもそれは、双方が愛し合っていることを確かめてからの約束です。私のフイアンセもスウェーデンで私が帰国するのを待っています」

オールセンはそういつて笑うと、くるりとうしろをふりむいて、山の方をゆびさしてそれまでにないきびしい顔で、
「私はあの山の向うで銅を取るために、かなり多くの煙を毎日出していますが、あなた方の村になんらかの、被害はありませんでしたか」

銅も煙も分ったが、なんらかの煙の被害という英語が分らなかった。

「私には、なんらかの煙の被害という言葉が理解できません、別な言葉でいつて下さい」

三郎は頭の中で書いた文章を読んだ。オールセンは、三郎の眼をじっと見詰めていたが、どうやらその意味が分つたらしく、

「煙による何等かの悪い影響が木や草や野菜にありませんでしたか」

「何等かの悪い影響？」

三郎はどうやらそれが分ったから、つい嬉しくなって鵲返しにいつた。

「そうです。煙による何等かの問題、そういうことがあったら、私に教えて下さい」

三郎はほとんど了解した。

彼は、彼とオールセンを取り巻いてきふいふとした顔で聞いている村人たちに向つていつた。

「この人はチャールス・オールセンという上の鉾山の技師で、スウェーデン人である。猟に來たついでに、この村へ寄つて、この村の人の所有林や、畑や田圃の作物に、銅を取るときに出る、煙による被害がなかったかどうか訊ねているのだ」

村人たちの間に囁きが起つた。

「そんなことあ今のところねえが、銅を取るときに出るあの黄色い煙は作物には悪い煙なのか」

といまさらのようにびっくりしている人がいた。

「そういうと、今年の冬、兎を追つて、沢の奥へ入ったとき、鉾山から流れ出して来る、煙を吸ったことがあった。

いやあな臭いがした。嗅ぐと咳が出た。あの煙を嗅ぐと死

ぬのか、その異人さんに聞いてくれねえか」

そういう人がいた。

「鉾山から出る煙を嗅いでも人間には害はない」

オールセンは、そのことを、三郎に繰り返していう。

「鉾山に來なさい。私はあなたをできるかぎり歓迎するでしょう」

といった。

「私も、訪問したいと思っています」

と三郎が答えると、

「あなたは、英語がたいへん上手だ。外交官になるといい、きっと成功する。もしそうなればあなたの背中にいるこの可愛らしい少女は将来日本大使夫人ということになるでしょう」

オールセンはそういうと、三郎の背で、^{ひとみ}瞳をこらして、

オールセンの顔を見詰めている、みよの頬を、ひとさしゆびでちよいとつついた。みよが声を上げて泣き出した。オールセンは、大変こまったような顔をした。赤い髪の、青い眼をした異人が近より過ぎたために、少女をおびえさせたのだと思つたらしかった。オールセンは、みよの前でべ

こべこと何回もお辞儀をした。その格好がおかしいので村人たちは声をあげて笑つた。それを区切りにしてオールセンは、御岩神社の社務所の入り口に立てかけて置いた獵銃

を肩にして、山道を鉾山の方へ去つていった。

「なんらかの煙の被害……それはいつたいどういうことだろうか」

三郎は紅葉の中へ消えていった、チャールス・オールセンの方を見ながらつぶやいていた。

この平和な村にいままで、かつて見たこともない、おそろしいなものが、足音を立てずに、忍び寄つて来るような不安な氣持だった。三郎は眼を紅葉の山から空へやつた。

明治三十六年の秋の空は不氣味なほど青く澄んでいた。

関根三郎は英語に興味を持った。それまでは單なる学科目のひとつとしか考えていなかった英語によつてチャールス・オールセンと、どうやら意志を通ずることができて以來、彼の英語に対する考え方が變つた。

中学校には英語の教師が三人いた。江崎教諭は横浜の商社にいたころ外国へ行ったこともあつて、會話に堪能であつた。江崎教諭は上級生の希望者を集めて放課後特に英會話を教えた。関根三郎は四年生になると、すぐこの課外授業に出席した。

「関根、お前の英語はなかなか素姓がいい」

江崎教諭はそういつて讃めた。

関根三郎は英語ばかりでなく他の学科の成績も良かった。

クラスでは常にトップにいた。

関根三郎が、英語の詩を馬上で歌いながら通学しているという噂が出た。馬で通学するだけならまだいいとして英語の詩など歌うなんて、生意気だからぶんなぐってしまえという上級生があつたが、いざとなると気おくれがしたのか、暴力沙汰にはならなかった。関根三郎が馬で通学することは、学校中で有名だった。

「関根家は代々大坪流の馬術を受け継いで来た家柄だから、三郎にもこの馬術の伝統を伝えたい。馬術はその日その日の研鑽^{けんさん}が大切であるから、三郎に馬で通学することを認めていただきたい」

関根兵馬は三郎が中学校に入学すると同時に校長に会つてこのことをたのみこんだ。別に馬で通学してはいけないう規則はなかったから、校長はそれを許可したのである。三郎は入四間から太田町の郊外まで馬で来て、馬を知人の家の庭につないでそこから下駄で登校した。

「関根、お前は高等学校、大学と進学していつて将来になるつもりだ。そろそろ進路は決めて置いた方がいいではないかな」

担任の村松教諭がそういったのは夏期休暇に入る直前のことであつた。

「将来のことはまだはつきり分りませんが、できたら外交

官になりたいと思つています」

三郎ははつきりいつた。去年、チャールス・オールセンに、外交官になればいいといわれて以来、彼の心の中では外交官が急速に成長しつつあつた。

「それはいい。君は語学が得意だし容姿も端麗だ。外交官には好適だな」

村松教諭にいわれるとおり、関根三郎は父に似て背は高く、母に似て眼鼻立ちの整つた少年だったが、容姿端麗という表現は女学生に向つていう言葉のようで、三郎には気に入らなかつた。

「鉾山を見に行きたい」

関根三郎は夏休みに入るとすぐ家人にいつた。

赤沢銅山へチャールス・オールセンを訪ねていつて、彼の英語の実力をためして見たいというのは、去年の秋から三郎が抱いていた小さな野望だった。そのことは誰にもまだ話してはいなかつた。

祖母のいねは真つ向から反対した。用もないところへ行くことはないといつたが、祖父の兵馬は、即座に許可した。「どうせなら村の若い者も一緒につれて行け、鉾山がどういふものかはつきり見て取つて来るがいい」

見て取つて来るがいいなどと、未だに二刀を腰に帯びた郷土であるかのような言葉を使う兵馬の頭の中には、鉾山

に最も近い村の長老としての責任意識が眼を開いているようであった。

「お兄ちゃんが鉾山へ行くならみよも一緒に行く」

みよは七つになっていたから、去年のように三郎におんぶして行くとはいわなかったが、鉾山へ行くことが、裏山へわらび取りにでも行くように気安く考えているらしかった。

「とんでもない、女の子が鉾山なんかについてはいけませんぬ」いねは眼くじらを立ててみよを叱った。

「なぜ女の子はいけないの」

みよは、黒曜石のように黒い、つぶらな眼を見張っていねに訊いた。

「なぜってね、女の子はやたらに外を出て歩くものではありません。女の子はなるべく家の中にいるものです」

「なぜ女の子は家の中にばかりいなければならないの」

みよの理屈にいねが困りはてているのを見て兵馬がいった。

「みよも行つて見て来るがいい、これからの女は一応なんでも勉強して置いた方がいい、それに鉾山とこの村との関係は将来、ますます深くなるだろう。いい関係が悪い関係かは別として、鉾山を無視してのこの村の存立はないと思う」

関根兵馬は手元の新聞に眼をおとしていった。その年の二月十日に日露戦争が始まっていた。銅の需要は急増していた。日本軍は破竹の勢いで露軍を圧倒していたが、相手は大国であるから一気に息の根を止めるということはできなかった。長期戦に持ち込まれるという不安もあった。戦争が長びけば、銅の需要は、いよいよ増えるだろう。七十を幾つか越してはいたが、関根兵馬の眼光は先の先を読んでいた。

関根三郎は村の若い者数人を鉾山見物に誘った。つつそでの着物に草鞋履き、烏打ち帽子をかぶっている者が多かった。申し合せたように、にぎりめしの入った包みを腰に巻きつけていた。みよも小さな草鞋を履いて一行の中に加わった。紺模様の筒袖の着物を着て、黄色い三尺をしめていた。髪は結び上げて、赤い紐で結んでいた。一行は露草の峠道を越えた。入四間村から赤沢銅山の見えるところまで一時間ほどかかったが、疲労を感じるほどのことはなかった。

峠を越えて少し降りたところで一行は休憩した。そこから赤沢銅山の全貌が見えた。そこは窪地であった。日立村からせまい沢を登りつめたところにできた、沢状の窪地を平らにして、そこに十数軒の人家が取りとめもなく建てられていた。ちよつとした部落という感じであった。部落の

奥にやや大きな家があった。家というよりも中学校の講堂のように容積を持った家だった。そこに赤煉瓦の煙突が四本立っていて、そこから黄色い煙が吹き出していた。そこからは坑道の入り口は見えなかったが、坑道から運び出した鉱石の堆積場の近くで、立ち働いている人たちの姿が見えた。

その鉱山の盆地を取りかこむ山々の木は半ばは枯れ、半ばは生氣を失った色をしていた。森林の下草も色あせて、全体的には枯れたように見えた。

「えろう殺風景なところだな」

関根恒吉がいった。恒吉は関根家の分家の後取りで、三郎より五つ年上だったが、この日の見物に加わっていた。

恒吉のいった殺風景なところということばがその場にびつたりした。たしかにそこは近よりがたいほど、殺風景であり、そのあたりの地下で、鉱石を掘っている鉱夫たちの姿が更に、陰鬱なものに想像された。

関根三郎は一行の先に立って、その殺風景な盆地へおりにていて事務所へ入って、鉱山を見学したいと申し入れた。チャールス・オールセンに誘われて、見学に來たのだということも忘れずにつけ加えた。はじめは、面倒くさそうな顔をしていた事務員も、オールセンの名前が出ると、すぐ席を立て、彼を迎えに行った。事務所の入り口の棚の上

に鉱石が並べてあった。説明書きの紙片が飯つぶで貼りつけてあった。関根三郎はそこで黄銅鉄鉱、黄鉄鉱という専門語を初めて知った。

金色の鉱物がきらめいている黄銅鉄鉱は美しくもあった、金色に輝くものが、金ではなくて銅であるだろうことは容易に分ったが、この硬い石の中から、銅だけを取り出すことは容易でないことが想像された。背後に人を感じてふり向くと、チャールス・オールセンが笑いながら立っていた。「私はあなたがきつと来るだろうと思って待っていました」

オールセンは関根三郎の手を握りしめていった。そしてすぐみよの方へ向きをかえると、

「大きくまりましたね、よくここまでひとりで歩いて來ましたね」

と、みよにもあいそよく話しかけた。三郎は、最初はしばらくもたついたが、すぐ馴れた。みよが來年は小学校へ入る予定だといったり、今日はどうしてもついていくと聞かないからつれて來たのだと話した。みよのことを話すのは容易だった。通訳らしい男が來たが三郎が英語を話すのを見ると、すぐに姿を消した。

「では早速、御案内いたしましょうか」

オールセンは、両手をいっばいにひろげていった。